

2008年12月18日付 朝日新聞



竹沢 素子 京都大学文学部助教授（文化人類学）

大みそか、米ニューヨーク・タイムズスクエアでのカウントダウンは、変革と希望の年の到来を待ち焦がれる大群衆の歓声で、いつにない盛り上がりを見せることだろう。「初の黒人大統領」バラク・オバマ氏の就任まで、あと1カ月となった。

無名だったオバマ氏が一躍注目を集めたのは、2年前に民主党大会で述べた次のスピーチである。「リベラルのアメリカも、保守のアメリカもない。黒人のアメリカも、白人のアメリカも、ラティーノ（中南米出身者）のアメリカも、アジア系のアメリカもない。あるのは一つのアメリカだけだ」

この言葉がなぜ人々の心をそれほど深くとらえたのか。人種による国の分断が、政治的信条による分断と並び米国人の危機意識を募らせていた背景については、あまり知られていない。

「一滴の血の法則」をもつ米国社会では、トップ・エリート

のオバマ氏でも人種差別を免れていない。だが米国社会において黒人であることには、彼がもたないもう一つの要素がある。黒人の家族やコミュニティで育ち、集団としての歴史的苦しみ

の記憶を継承することだ。選挙中、オバマ氏が師と仰ぐJ・ライト牧師が、エイズウイルス（HIV）は米政府が企てた黒人浄化計画である、などと発言し、オバマ氏は「人種対立を

## ◆オバマ次期大統領 人種の分断から「一つのアメリカ」へ

の治療」と偽って、399人の貧困層黒人に人体実験を行っていた。「タスキージ」の梅毒研究」と呼ばれ、有効な治療法が存在していたにもかかわらず、梅毒を患う彼らに説明も治療も施さず、ただ経過を観察したのである。このような歴史的事実は無数に存在する。話は奴隷制やリンチだけではないのである。

人種差別を撤廃する公民権法や、差別是正のための積極的措置「アファーマティブ・アクション」が実施され始めて40年余。だが、00年の国勢調査によれば、黒人1世帯あたりの平均総資産は非ラティーノ系白人のその10分の1以下であり、格差はますます広がっている。

一方、多数派白人層には「いつまで過去の世代の差別に代償を払い続けるのか」「逆差別ではないか」といった不満が鬱積している。それゆえにネオリベラル派も、既得権を維持したい保守派も、人種やジェンダーなどの少数派の枠を考慮しない「カラーブラインド社会」への移行を訴えてきた。少数派の中でも、人種やジェンダーで自分が定義されることに反発する若者が多く現れ始めた。

しかし、そもそも差別の実態把握も是正も「カラーブラインド社会」では実現できない。過去の負の遺産と「人種」自体をどう扱うかでも、底流では対立と分断が深まっているのだ。

米国は経済危機やイラク戦争など山積する喫緊の課題を抱えている。そうした中、人種の超越を訴えるオバマ氏は、分断を紡ぎあわせ「一つのアメリカ」へと導けるか。黒人社会にも白人社会にも、父の国ケニアにも自らの居場所を見いだせず、ひとりアイデンティティーの葛藤と闘ってきた末に、たぐいまれな融和の術を身につけた人物は、それを「不可能な夢」に終わらせない。オバマ氏は、そう人々に思わせるのである。